

多文化共生のためのコミュニケーションツール作成の取り組み

—中西ゼミ2021-2022年度活動報告—

● 中西 太郎

1. はじめに

本稿では、跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科「コミュニケーション文化学演習」の授業において、筆者が受講生とともに取り組んだ多文化共生のためのコミュニケーションツール作成、配布の一連の活動について報告する。

2. 多文化共生のためのコミュニケーションツールについて

本稿では、日本語非母語話者が母語話者とコミュニケーションを行う場면을対象にする。

近年、非母語でのコミュニケーションを助けるツールは急速に進化、普及している。手近なものとしては、Web上で利用できる自動翻訳サイトや、電子メディアにインストールして利用できるアプリなどのツールがある。

一方、汎用性が高いこれらの翻訳ツールは、次のような欠点もあると言える。

- (1) 各言語の標準とされる言語変種を変換ソースとしていることが多く、標準変種以外のバリエーションの翻訳に対応する力が弱い。
- (2) 使用者が表現したいと思った表現を変換するのみの効力にとどまり、コミュニケーションの場面に必要になる一連の表現を一覧できない。
- (3) 新しい事物や出来事にまつわる表現の翻訳への対応に一定の時間を要する。
- (4) 電子メディアが利用できない環境・状況においては活用できない。

このような欠点を踏まえ、翻訳ツールに加え、特定の場面や状況に特化した、多様なコミュニケーションツールが整備されることが有用だと思われる。

特定の場面・状況に特化して利用できるよう作成されたコミュニケーションツールとしては、災害関連語彙の理解の手助けとなる『災害支援カード』（山下・高丸・中西・津田・権名、2014）や、地方の在留外国人の方言理解・習得を助ける『東北地方の外国人住民のための「くらしの方言集」』（斎藤、2017）、急激に広まった新種の災害下の診療場面の会

話補助に特化した「新型コロナウイルス対応 指さし会話」(YUBISASHI、2020)などが挙げられる。

しかし、コミュニケーションのあり方は、仕手の需要や場面に応じて多種多様であり、その点で、コミュニケーションを助けたり、活性化したりするツール開発の余地はまだ残されている。

3. 2021年度「コミュニケーション文化学演習ⅠA」における活動

2節で述べたような背景を踏まえ、筆者の担当授業「コミュニケーション文化学演習ⅠA」(2021年度)では、ことばの研究成果を応用し、多文化共生のためのコミュニケーションツールを作成する活動などに取り組んだ。

受講生を4グループに分け、それぞれのグループで企画案を作成し、コンテスト形式で最も良い企画を提案したグループのアイデアを実現することにした。企画評価の観点は、目的と内容の明確さ、計画性、独自性・独創性、効果の高さ、発表の完成度、質疑の適切さで行った。

4グループからは、それぞれ「観光情報付方言ポスター」、「誰でも気軽に方言を学べるe-learning 方言クイズ」、「Foreign Tourist 向け交通案内 Web サイト」、そして「多言語アレルギー食材名表記付きオリジナルエコバッグ/Web サイト」の企画が挙げられた。このうち、最も優れた企画として「多言語アレルギー食材名表記付きオリジナルエコバッグ/Web サイト」が選ばれた。

この企画は、「アレルギーや宗教によって食べられない食品がある外国人のために原材料名の表記を英語で表記するなど工夫し、普段の買い物をしやすくする」ことを目的とし、「①アレルギーや宗教によって食べられない原材料名や、それらが含まれる日本食名を英語・中国語・韓国語で示した Web サイトの制作、②Web サイトの QR コードと代表的なアレルギー食材名の英訳をデザインしたエコバッグの制作」を行うというものであった。

その企画コンセプトに沿って作成されたエコバッグが図1の作品である。製作に当たっては、ノベルティ・販促品・記念品製作サービス『ラクスル』を利用し50組を発注した。

図1のエコバッグのイラストは学生がデザインし、そこに掲載し切れなかったその他のアレルギー食材やその食材を含む日本料理を、QR コードを読むことで表示できる Web サイト上に示している。

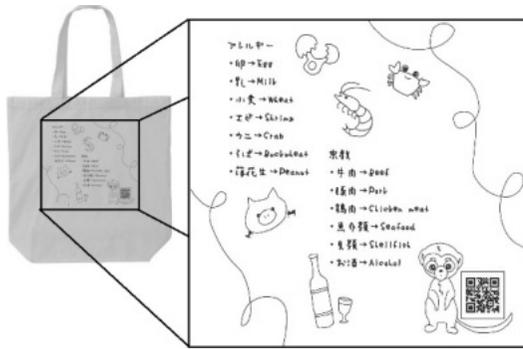


図1. 多言語アレルギー食材解説付エコバッグ 図2. 多言語アレルギー食材・料理解説 Web サイト

Web サイトは Google 提供のウェブサイト作成ツール Google Sites を利用して作成している。サイト上には、アレルギー食材と代表的な日本料理をイラストで示し、それぞれに日・英・中訳とローマ字の読みを付け名称を示している (図2)。日本料理には、そこに含まれるアレルギー食材の英訳を付している。

4. 製作物の寄付活動

エコバッグ作成の取り組みの次段階は、それを日本在住の在留外国人に配布することである。

次年度の担当授業「コミュニケーション文化学演習ⅡA」で有志を募り、学生が主体となって文京区周辺の日本語ボランティア教室を複数選定し、連絡を行った。そのうち、当時対面で活動を行っていた文京区内の日本語ボランティア教室「しゃべろう日本語」を訪問し、「多言語アレルギー食材名表記付きオリジナルエコバッグ」15組を当該団体に寄付した (図3)。配布した在留外国人の反応は好評で、当該団体からは活動の意義を高く評価された。



図3. 文京区での日本語ボランティア教室訪問と寄付

さらにその後、2022年度の「コミュニケーション文化学演習ⅠA」の方言調査のフィールドワーク実習地として訪問した埼玉県深谷市でも、教育委員会を通して、当地の日本語ボランティア教室2団体にエコバッグ15組の寄付を行った。

5. おわりに

本稿では、筆者が「コミュニケーション文化学演習」受講生とともに取り組んだ多文化共生のためのコミュニケーションツール作成、配布の一連の活動について報告した。

本活動の最大の意義は、一連の活動を通して、この活動に取り組んだ学生や、エコバッグの配布を通してコミュニケーションツールの存在を知った人々に、在留外国人の方々とのコミュニケーションを円滑に行うための「ツールを作成する」という活動の方向性を示すとともに、多文化共生社会に必要な環境作りにも目を向ける姿勢を涵養できたことだと考えられる。

一方、その効果は、活動を通して接した人々の範囲にとどまる限定的なものとも言える。より効果的に多文化共生社会に必要な環境作りを推進していくためにも、多文化共生のためのコミュニケーションツール作成の事例を積み重ね、モデル化して広めていくことが重要だと言える。また、配布した方から改善点などを聴取し、製作物の完成度を高めることも求められる。すべて今後の課題である。

<参考文献>

山下暁美・高丸圭一・中西太郎・津田智史・椎名渉子（2014）『災害支援カード』明海大学応用言語学研究科

<参考 Web サイト>（50音順、アルファベット順）

斎藤敬太（2017）『東北地方の外国人住民のための「くらしの方言集」』（<http://saitokeita.web.fc2.com/hougenshu/>、2022年12月アクセス）

しゃべろう日本語「しゃべろう日本語（Shaberou Nihongo）へようこそ」（<https://shaberou.grupo.jp/>、2022年12月アクセス）

ラクスル株式会社「ノベルティ・オリジナルグッズ・記念品ならラクスル」『ラクスル』（<https://novelty.raksul.com/>、2022年12月アクセス）

YUBISASHI（2020）「新型コロナウイルス対応 指さし会話」『旅の指さし会話帳』（https://www.yubisashi.com/covid_19/#sougou、2022年12月アクセス）

【付記】本研究は JSPS 科研費課題番号20K00649の助成を得て実施したものである。